

NEWS LETTER

都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN

VOL.

57

2007
1228

年の瀬も押し迫ってまいりましたが、皆様におかれましてはますますお元気でお過ごしのことと存じます。本年最後の発行となります、都市史研究会のニューズレター57号をお届けいたします。二年間にわたり出版企画『シリーズ伝統都市』と連動して行われてきた例会も一段落を迎え、都市史研究会は新たな段階に入ることとなりました。お待たせしておりました『年報都市史研究15 分節構造と社会的結合』、『別冊都市史研究 江戸とロンドン』（ともに山川出版社）も相次いで出版されるなど、都市史研究会は引き続き活発な活動を行っていく所存ですので、奮ってご参加くださいますようお願いいたします。

本号では2007年秋以降、12月までの活動の内容と今後の予定について報告いたします。具体的には10月と12月に行われました例会と、11月に行われました科研費基盤研究「とらっど3」との共催によるシンポジウム「現代都市類型の創出」について、報告要旨や参加記を掲載いたします。巻末には科研費基盤研究A「都市アイデアの生成と変容に関する研究」の調査旅行報告記も掲載しています。

さてご存知の方も多いかと思いますが、昨年末以来準備を進めてきました「とらっど3」及び都市史研究会のウェブサイトが10月15日に公開されました（<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/trad3/>）。今後とも情報の更新に努めて参りますので、ニューズレターともどもご愛顧くださいますようお願いいたします。末筆ながら来年がよい一年でありますよう、皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

第66回都市史研究会例会

10月29日、東京大学工学部1号館建築学専攻会議室において、第66回都市史研究会例会が行われました。当日は武部愛子氏と横山百合子氏による報告が行われ、活発な討議がなされました。報告要旨は以下のとおりです。

報告要旨 浅草寺末門寺院の存立構造

浄光寺（木下川村）を素材として寺院の存立構造について検討した。浄光寺は、浅草寺末門徒寺院25寺のうち本所最勝寺と共に常に上座にある寺院で、唯一朱印地（5石）を与えられ、鷹場御膳所に設定されていた。この浄光寺について、浄光寺近世文書や『浅草寺日記』の浄光寺に関する記事から、寺院経営のありようや門前の社会＝空間構造の一端を明らかにした。

武部愛子（東京大学大学院人文社会系研究科日本史学研究室）

報告要旨 近世身分制解体と土地所有 賤民廃止令を素材の一つとして

近世社会において、身分は空間の所有・占有と不可分なものとして形成されてきた。本報告は、この点に着目し、空間の所有・占有解体の視角から近世身分制の解体過程解明を目指すものである。具体的には、明治元年～5年初頭までの東京における土地所有・占有の変化の過程を、賤民廃止令や武土地廃止に関わる諸法令を素材として検討した。

横山百合子（千葉経済大学）

都市史研究会シンポジウム「現代都市類型の創出」

11月10、11日の二日間にわたり、東京大学工学部1号館15号教室において、ぐるーぷ・とらっと3との共催で「現代都市類型の創出」と題したシンポジウムが開催されました。当日の報告者とタイトルは以下のとおりで、56名の方が参加しました。なおこれらの報告の詳細は来年発行される『年報都市史研究16 現代都市類型の創出』（山川出版社）に収録される予定です。

10日（土） 個別報告 14：00～17：30

鈴木真歩（東京大学）「19世紀前半のニューヨークにおける住宅地開発 不動産、階級別居住、コミュニティ」
土田宏成（神田外語大学）「総力戦と都市 1930年代防空演習にみる都市の組織化」
池田嘉郎（新潟国際情報大学）「現代都市類型から見た20世紀モスクワ」

11日（日） 個別報告 + ラウンドテーブル 10：00～17：00

初田香成（東京大学）「日本橋問屋街の都市不燃化構想 現代都市胎動期としての1950年代」
中川理（京都工芸繊維大学）「都市空間を可視化する現代都市 近代京都における「歴史都市」の成立から考える」

ラウンドテーブル「現代都市類型の創出」

司会：伊藤毅（東京大学）

話題提供：伊藤毅 + 吉田伸之（東京大学）

討論：伊藤毅 + 鈴木博之（東京大学） + 増谷英樹（獨協大学） + 吉田伸之

参加記

今年度のシンポジウムは「現代都市類型の創出」というテーマで行われた。そもそも、都市史研究会が発足段階から主な研究対象としてきた「伝統都市」とは、19世紀以降欧米を出発点に高度資本主義社会の拡大にともなって世界中に広がった画一的な「現代都市」に対し、多様な文化的個性を持つ前近代の都市を「伝統都市」と定義し、さらに「伝統都市」と「現代都市」の移行段階を「近代都市」と定義する三分法の上によって立つものである。

しかし、われわれがその時代に住むがゆえに一種自明の前提とされてしまう「現代都市」とは果たしていかなる都市類型であるのか。またそれを都市類型として設定することは可能か。これらの問題に対し今回は日本を中心に、アメリカ、ロシアをフィールドとし、鈴木真歩氏、土田宏成氏、池田嘉郎氏、初田香成氏、中川理氏による5報告がなされ、ラウンドテーブルが行われた。

鈴木氏の報告は19世紀中期のニューヨークにおけるアパートメント建設の動きを、産業発展による都市構造の変化、また不動産開発市場の成熟と建設、購買層など市民の住宅に対する選好や意識の変化、建設技術革新などの側面から立体的に捉えたもので、現代都市を特徴付ける居住形態や景観がいかなる要素から成立していったかをイメージ豊かに跡付けるものであった。

土田氏の報告は、両大戦間期の都市防空体制を題材に、現代都市特有の災害を契機とした都市の組織化の問題を東京のみならず、大阪、北九州などの地方都市も視野に入れ、行政、また住民の側から捉えたものである。関東大震災の大阪への影響など都市相互の影響関係、また「一般市民」を対象とした協力体制の樹立に、資本主義経済の位相とはやや異なる近代国家体制の現代都市の画一化、均質化に及ぼす力が窺え興味深かった。

池田氏は20世紀初頭の社会主義国家ソヴィエトの首都であるモスクワが、ある種資本主義都市（現代都市）の克服を目指し、空間にアメリカニズムの様相が濃く見られることを、映像史料などを多用して報告された。そこで「参照系」として、資本主義社会における「現代都市」をとらえることが可能であることを示唆され、かつそれとは異なる人間類型の創出を目指した社会主義国家の共時的存在に対する注意も喚起された。

初田氏は主に戦後の現代都市形成期を、資本主義下での大企業による都市の商品化が進む一方で、「まちづくり」運動に見られるような市民社会が成立していく二つの位相の同時進行の過程と捉えられており、1950年代の日本橋問屋街の不燃化運動を、現地の中小商業者の動きに注目しながら、60年代以降はっきりとした形をとる上記のような二重の位相の萌芽として描かれている。

中川氏の報告は明治維新以降の京都の東山開発を中心に、「歴史都市」京都が、京都が産業振興をはかり、現代都市化を狙う過程で生み出されていったものであることを描き出された。「伝統都市」が、ある種現代のわれわれが日々参照し、利用し、生み出して行くことにより継続（むしろ生産）されていくことがわかり、歴史の責任について考えさせられる報告であった。

ラウンドテーブルは伊藤毅、鈴木博之、増谷英樹、吉田伸之の4氏により行われたが、席上でも言われたとおり、「現代都市」はわれわれがその中で住むものであるがゆえに、なかなか全体像を展望することは難しい。つまり、いくばくかでも捉えることができるものは一定段階の距離を経た「近代都市」段階の様相しかないのではないかとと思われる。しかし、今回の諸報告で見られたように現代都市はその存在を確実に細部に表し、前代にその萌芽を示しているのであり、その捉え方が変わるとき、「伝統都市」像もまた変わっていくのではないかと（分析概念としての「資本主義」に対する評価の近年の変化を見ても）というのが今回のシンポジウムの全体的感想である。

江下以知子（東京大学大学院工学系研究科博士課程）

第67回都市史研究会例会

12月10日、東京大学工学部1号館建築学専攻会議室において、第67回都市史研究会例会が行われました。当日は伊藤毅氏と同研究室の禹成勳氏、長谷川実希氏、京谷友也氏による報告が行われ、活発な討議がなされました。報告要旨は以下のとおりです。

発表題目 ベトナム・フエをめぐって

伊藤毅（東京大学）

発表題目 『大南一統志』にみるフエ

禹成勳（東京大学）

報告要旨 フエ 都市造営・街区・民家の三スケールより

ベトナム中部の都市フエは、19世紀に入って建設されたにもかかわらず復古的な都城の形態をとっている。我々の実測結果と史料を用いて都城造営・街区・民家の三点から分析し、フエを構成する理念を解き明かす。

都城造営：皇城と運河の位置による機能ゾーニング分けがみられる。街区：地割の変遷と建物の配置は、都城造営時の立地機能とその後の開発変遷によって説明される。民家内部の使われ方：寝室・キッチン・祖先壇といった機能は、全ての調査民家において共通した「母屋を中心としたグリッド構造」に則って配置していた。

今回は三つの点それぞれにおける構造を分析したが、それらを取りまとめる上位の理念(=フエ都城のイデア)を見出すことを今後の課題とする。

長谷川実希(東京大学)

報告要旨 フエの住居

フエに現存する住居にふたつの類型をみいだした。屋敷型と市屋型がそれである。開口部、屋根、庇の寸法ならびにそれらの比を検証することで前者は外部との接触を拒み自立した空間を有すること、後者は都市と建築を連続的に扱ったものであることを明らかにした。また、装飾や細部の仕上げをみていくことで敷地内、建物内に存在する空間のヒエラルキー、すなわち前面道路から屋敷地の奥にいくほど序列が下位になること、間口方向では中央が上位であることを確認した。

京谷友也(東京大学)

ラウンドテーブル&ワークショップ開催のお知らせ

都市史研究会ではとらっど3と共催で、フランス・ボルドー大学よりフランソワ・J・ルッジウ先生(近世イギリス都市史専攻)をお招きして、以下の要領でラウンドテーブルとワークショップを開催する予定です。ラウンドテーブルはルッジウ氏を含めた研究交流会、ワークショップは学部・大学院学生向けの史料紹介を含めた演習・講義形式で行われます。詳しい内容については漸次ウェブサイトやメールで報告する予定です。フランス史・西洋史のみならず、伝統都市に関心を寄せる研究者および学部・大学院学生諸兄のご参加をお待ち申し上げます。

なお、下記の予定は、やむを得ない事情により変更になる場合があります。また4月以降の都市史研究会の予定は次号ニューズレターでお知らせします。

ラウンドテーブル

日時 2008年3月11日 10時~

会場 東京大学法文2号館

フランソワ・J・ルッジウ 「L'habitat des élites dans les villes françaises au XVIIIe siècle (The elites residential strategies in the French eighteenth-century towns): 十八世紀フランス都市におけるエリート層の居住形態」

18世紀フランスの都市エリート(貴族・役人・商人)の居住に関する戦略について、いくつかの事例を元に述べる予定である。その際、主要なフランス都市におけるエリート層の所在や地理的な移動に関する史料を呈示する。これまでは、単にエリート層が集住するために、街路や郊外が新しく開発されたことが、都市拡大の主な要因であると検討されてきた。それでも、わたしは、この居住地を分化するプロセスや新しい地域へ移住しようとする傾向

に追従する願望などは、特に経済的な要因だけでなく文化的な制限によって阻止されていたことに言及したい。そのため、ほとんどのエリート層は、流行からは後れているが、長年にわたり家の財産としてきた高級で古い建築のある地区に居住し続けたのである。

ギョーム・カレ（フランス国立社会科学高等研究院）「未定」

岩淵令治（国立歴史民俗博物館准教授）「未定」

日本人報告者1名「未定」

ワークショップ

日時 2008年3月14日 10時～

場所 東京大学法文2号館

1 . 「Populations, families and mobility in Charleville during the 18th century : 18世紀シャルルヴィルの人口・家族・移動」

ここでは17世紀初頭につくられた北フランスの小都市シャルルヴィルにおける人口について話したい。この都市では18世紀初頭から20世紀中頃にかけての都市住民に関する市勢調査の一群が例外的に残っている。わたしは市勢調査によるデータを教区の簿冊や公証人が保管した証書によるデータをクロスさせるという、国の補助金によるプロジェクトに関わっている。（<http://www-cahmc.u-bordeaux.fr/mpf/>を参照）そこで、社会的流動性の増減パターンを理解するために、いくつかの家族についてその構成者すべての社会的軌跡をたどる考えである。また、その移住や家系の断絶についても注意深く検討したい。このワークショップでは、誠に貴重な市勢調査に対し、特別な注視をしているフランスおよびヨーロッパの社会史学者らが使用する文書と、総合的な調査結果とを呈示する機会としたい。

2 . 「The experience of the early modern town : the testimony of the egodocuments : 近世都市の経験“ego-documents”の証言」

ここでは近世期（17～18世紀）の都市居住者が書いたフランスおよびイギリスの“ego-documents”（日記、自伝、年代記など）を取り上げたい。これらのテキストは、最初のワークショップで呈示した社会史の史料とは全く異なった種類のものである。これらの史料は居住者の日常とともに、町の共同組織や市民軍のような地方機関といった都市における権力との関係に光をあてるものである。これらFrench Public Archivesに保管されているすべての史料は、ウェブサイト上で公開するよう計画されており、これにも私は関与している。（<http://www.ecritsduforprive.fr>を参照）

中国現代アートの現場
中国・ベトナム視察旅行記
鈴木博之（東京大学）

北京へ

2007年3月5日から6日にかけて北京を訪れ、6日から8日の早朝まで上海を訪れる機会があった。「とらっど3」による科研Aの研究の一環として行われた中国・ベトナム調査に同行させて頂いたためである。

もっともわたくしは3月4日までイギリスとチェコに出かけていて、成田に戻っても帰宅できずに、成田空港のホテルに一泊してそのまま北京に来たのだ（前もって空港に中国・ベトナム旅行用の衣類などを預けておいて、そこで荷物を入れ替え、それまでの衣類などは宅急便で家に送ったのであります。同行された「とらっど」の皆さまが、衣類の着替えなしでヨーロッパからアジアへの旅行をしていたのではと、不潔に思われるといけないので、以上付け加えておきます）。ほかの科研メンバーの研究者グループは先に北京に出発して、わたくしは途中から一日遅れで合流したのである。じつはこの視察の最後の日（ベトナム）も、わたくしだけ一日早く帰国しなければならず、ひとかたならぬご迷惑をおかけした。さらに付け加えると、2006年末にわたくしは座骨神経痛を発症して、このときはまだ歩くのが極めて遅く、その点でもメンバーの皆さま方の視察に多大なご迷惑をおかけしたのだ。大学院生の諸君が、のろのろと歩くわたくしの前を、どんどん進んでゆくのはまずいと思ってか、肅々と葬列のように後に従ってくださっていたのは、まことに申し訳なく、深く感謝し、恐縮し、同時に内心おもしろくもありません。

そういうわけで、北京も上海も一日半程度の滞在であるから、のろのろ歩いたわたくしが何を見たかといわれれば、何も見ませんでしたというほかない。けれども（のろのろ歩きわたくしが）瞬間的に見た中国であっても、それまで見たこれらの都市の印象とは多少異なる部分を、今回は垣間見られたように思う。

北京オリンピック前夜

北京はオリンピック前夜の喧騒に満ちていた。どこもかしこも工事中である。そういえば、北京空港に降りたところで、建築家の隈研吾さんに出くわした。彼は乗り継いで西安に向かうとのことだった。隈さんが物見遊山に行くわけではないから、彼は何かの仕事を抱えているのだろう。中国の建築は元気がいいのだ。

北京で科研のメンバーの方々に合流してオリンピック施設

のそばまで行って眺めたが、噂にたがわぬ混乱ぶりであった。主会場となる「国家体育場」は、国際コンペによってスイスのヘルツォーク・ド・ムロンが設計した。「鳥の巣」と呼ばれているこの施設は、スタジアムの周囲に鉄骨の籠を被せたようなかたちをしており、不合理な構造形式だと批判されている。水泳競技が行なわれる「国家遊泳中心」は、シドニーのPTW事務所と中国CSECの共同設計で、構造はイギリスのアラップ社が担当している。水泡に似たパターンを描く外周の骨組みが建物を支える。これも水泳に水泡を組み合わせたという点では機知に富んでいるが、とりわけ構造的に意味があるわけではないらしい。これは後で構造家の川口衛先生にうかがった話である。つまりは、これはアートなのだ。屋内競技場「国家体育館」は、当初の案が破棄されて当たり障りのないウェーブ状の屋根構造をもつ建築となった。周囲は混乱しており、しかも近くまでは行けなかった。

これ以外の建設もすさまじく、北京は大変貌中である。ただ、これら競技場に隣接して、台湾出身のC・Y・リーが設計したモルガン・センターが建っているのを見ることができたのは収穫だった。モルガン・センターは林立する高層ビルからなる建築群である。一番はじめの一番高いビルの頂部は、明らかにドラゴンのかたちをしている。設計者C・Y・リーの盟友であり、このビルの企画に参画している早稲田大学教授の石山修武に聞いた話では、このドラゴンはロシアをハッタと睨んでいるのだそうである。北京の混乱はわたくしの想像力の限界を遥かに超えている。

その他の現代建築としては、磯崎新が設計した現代美術館の工事現場を見ることができた。中国としては例外的に清潔な現場だという話であったが、確かに整頓された、日本並みの建築現場だった。磯崎事務所の方に案内して頂いたが、トップライトをもつ野心的な作品と思われた。ちょうど躯体ができ上がったところだったので、建築がもっともダイナミックに感じられるのである。この視察から約半年後に、ローマでザハ・ハディドの設計した21世紀美術館の建設現場を見る機会があり、そこで磯崎の北京での仕事を思い出した。ザハのローマにおけるこの作品は、彼女にとっては最初の実施作品だったといわれる（もっとも建設に手間取ったために、彼女の作品はいくつも既に完成しているが）。規模も磯崎の美術館よりずっと大きい。両者はコンクリート躯体をずらしながら重ねるような構成をもち、トップライトを効果的に用いている点で共通する。ここだけの話だが、ザハの作品はコンクリートによる高速道路の橋脚からできた美術館のようで、磯崎より数倍迫力に満ちていた。そこに現代の潮流がある。

798工廠

北京で案内してもらった地区に、798工廠がある。工廠といってもひとつだけの工場ではなく、北京のなかに配置された工業地区のひとつと考えた方がよさそうである。いずれの現代都市の場合もそうであろうが、北京でも工業地区の再配置が進行していて、798工廠内の工場もいくつかが移転・再編されている。その結果生じた空き工場に現代美術の工房やギャラリーが持ち込まれた。

わたくしたちが訪れた工場のなかには、兵馬俑をパロディ化した作品が並んでいたり、ビデオアートを扱う画廊があったりしたが、工場の壁面には毛沢東主席を賛美するスローガンが残っていたりして、歴史の重層性が感じられた。1945年に生まれ、1968年に大学を卒業したわたくしは、中国文化大革命、パリ5月革命、ベトナム戦争、ポルボトなどには過剰に反応してしまう（今回訪れた中国もベトナムも、最近よく行くカンボジアも、はじめて訪れたときには、その国に入ること自体が過剰反応を引き起こしたものだ）。工場の重厚長大な空間は現代アートにまことにふさわしいものがあるし、こうして「アート化」された旧工場のすぐ脇に、いまでも稼働している工場があったりするの興味深かった。

798工廠地区を案内してくれたのは、わたくしの研究室に韓国から留学してきて、現在は北京で建築事務所（これもまた、中国からわたくしの研究室に留学したリュウ・ユー君が主宰している）での仕事もしているジョン君であった。彼の話では、中国の人々はアート作品が好きで、また現在の中国は一種のパブル期にあるので、投資として芸術作品を購入する人も多いのだという。ジョン君はこの地区を含めた、中国における保存事業をテーマに博士論文を書いているので、この地区の背景について、やがて詳しい分析を示してくれるはずである。



798工廠内の作品



上海莫干山路50号内、上海アート画廊

798工廠地区は中国の美術愛好家・投資家のマーケットに支えられ、観光名所ともなっているという。荒廃しかねない地区に芸術家や芸術作品のちからを導入して再生を図るという手法は、ニューヨークのソーホー地区など、多くの実例があるが、北京においてもこうした試みがあることは興味深かった。それは北京が都市としての現代性を十分に備えていることの証明でもあるからだ。798工廠の未来を今後とも見据えておきたいと感じた。

上海莫干山路50号

上海でも同じような現代アートの地区を訪れることができた。上海莫干山路50号がそれであり、ここもまた工場地区の再生である。この地区は上海経済委員会によって、2005年に「上海創意産業集聚区」とされた。上海は戦前から芸術の中心のひとつであったから、アートのポテンシャルはもともと高いものがあるであろう。上海莫干山路50号地区も、先端的といってよい画廊や工房が軒を連ねている観があった。工場空間をそのまま使っている例もあるが、ここでは北京と多少違って、空間の加工が積極的であるように思われた。ここを案内してくれた上海の同済大学の方の話では、同済大学のスタッフもこの改造にいろいろ参加しているとのことである。

こうした場所を歩いているとき、前方から日本人らしいひとびとが歩いてくるのに出合った。日本人観光客が歩いているのは不思議ではないが、そのなかに旧知の大阪の国立国際美術館長の建畠さんがいるのには驚いてしまった。先方も訳が解らなかつたらしく、双方しばらく見つめ合ってしまったのだが、考えてみれば上海の現代アートの中心地に建畠さんがいるのは不思議ではない。北京空港で隈さんに会うようなものだ。聞けば美術関係者と中国現代美術展を開催するための調査だとのこと。彼に教えてもらって上海アートという画廊に入ってみる。さまざまなタイプの作品が展示してあって興味を引かれた。画廊の女主人は日本の美術関係者たちが訪れていたことを知らなかったから、建畠さん一行は黙ってこ

こを訪れていたらしい。たしかにここには世界のどこで見ても魅力を感じるような作品が並んでいた。上海のポテンシャルはさすがに高い。その後、上海アート画廊からは、定期的に案内カードが送られてくる。金ができたら、ここから上海アートを購入したいものだと思わせる。

この地区の入口近くには極めて洒落た喫茶店というかカフェというかカフェバーというか、いずれにしても洒落た店があって、わたくしたち一行はそこで一休みして、東京にいる

ようなぼんやりした一時を過ごすこともできた。これもまた、いまの中国を知ることであった瞬間であった。

[付記] 本エッセーはとらっと3における科研A「都市イデアの生成と変容に関する空間論的研究」のメンバーで、本年3月4日から12日まで中国・ベトナムを調査した際の記録の一部です。

News Letter 都市史研究 Vol. 57
2007年12月28日発行

事務局：〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科日本史学研究室内
編集担当：初田香成（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）、竹ノ内雅人（同大学院人文社会系研究科日本史学研究室）
レイアウト原案：岩本馨（京都工芸繊維大学工芸科学研究科）